

若者が政治について語るコミュニケーション・メディアとしてのラジオ

代表研究者 富永京子 立命館大学 産業社会学部 准教授

1 研究の目的

本研究の目的は、政治的・社会的な事柄に関する対話の場としての「ラジオ番組」と、そこでの対話を媒介する「投稿・投書」に光を当てながら、本来娯楽の場である深夜ラジオ番組において、いかにして政治的・社会的な議論が可能になったのかを明らかにするものである。

深夜ラジオ番組が本格的に始まった 1970 年代において、若者はいわゆる「しらけ世代」「無関心世代」といった名称をもって一括りにされ、政治や社会的な出来事に対して一貫して無関心を貫く存在として表象されてきた(小谷 1993, 片瀬 2015 など)。しかし深夜ラジオ番組を通じて、学校・家庭といった社会的集団における悩みの語り、あるいは社会的強者に対する批判的意識を含めた「笑い」や「いじり」を通じ、若者たちは政治的・社会的な思索、そしてメディアを通じた連帯を深めていた(村上 2018 など)。つまり、ラジオというメディアは、1970 年代以降において社会・政治に対峙する若者たちの孤立感を救い、対話を促す作用を担ったと考えられる。本研究では、ラジオを若者が社会について語ることを可能にするコミュニケーション・メディアとして見なす。さらに、そこで行われた構成作家・パーソナリティ・投稿者・聴者らの関係を検討することにより、政治・社会について語ることでできる「公共圏」としてのメディアについて考察する。

近年、政治的・社会的議論の場としてウェブや SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)が台頭し、若者も参入する様はたびたび見られる。しかし、ウェブなどで見られる政治的議論は、しばしば分断や排除を伴う事態に陥ってしまうことも珍しくない。メディアを媒介として、公共に開かれつつも、相互理解や熟議が可能なコミュニケーションはいかにして可能になるのだろうか。本研究はラジオにおける政治的・社会的対話を検討することで、その手がかりを明らかにしたい。

2 先行研究と方法

2-1 先行研究と本研究の問題意識

報告者はこれまでの研究において、政治的な事柄に関心を持ちながらも、それを日常の場で発露できない若者たちが、政治的な意見や主張を表明する過程を明らかにしてきた(富永 2017)。分析の結果、このような「若者の政治忌避」という傾向は 1960 年代後半から始まっており、とりわけ親世代が経験したあさま山荘事件や連合赤軍事件といった社会運動への忌避感や嫌悪感と密接につながっていることが分かった。日本社会において若者は「政治に無関心」な存在として表象されており、そのレッテルが、若者に学級や地域といった場で政治的な対話をさせることを阻んできた面がある。

先行研究において、1960 年代後半に顕著にみられる「政治の季節」や「激突の時代」を経た若者文化は、どのような形で位置付けられるのだろうか。若者文化に着目した研究では、若者たちが「対抗の主体」から「消費の主体」へと変容したという議論がなされる(山田 2000, 2009; 中西 2012, 小谷・土井・芳賀・浅野(編) 2011 など)。1970 年代後半以降の「消費社会を謳歌する若者像」が見られたのは、投稿雑誌やラジオ番組を媒介として流通した、いわゆる「サブカルチャー」と呼ばれる若者文化においてだろう(中西 2012)。若者論や現代社会論の研究者は、こうした若者文化を「消費社会的アイロニズム」(北田 2005)や「僕らという仲間意識」(難波 2006, 2007)として、「政治の季節」が終焉した後の、政治に対する関心の減退や社会参加への意欲が学生運動・市民運動への参加とは関わりをもたない文化として捉えてきた(北田 2005, 難波 2006, 大塚 2004)。

しかし一方で、こうした「サブカルチャー」は、もとは対抗文化(カウンターカルチャー)として研究されてきた。対抗文化(カウンターカルチャー)は、基本的には「一つの生活様式」「現代社会の主流をなす想定から根原的に離脱した文化」(Roszak 1969=1974: 34, 57)といった定義が置かれ、テクノクラシーへの反発、効率性・競争性・合理性が支配する現代社会への対抗といった理念をもつ文化的実践と考えられる(Roszak 1969=1974, 橋本 1991, 竹林 2019, Thonton 1996, Hebtige 1976=1986)。また、担い手が「若者」である点に重点が置かれている(Roszak 1969=1974, 竹林 2019, 石田 2007)。

ここで一つの疑問が生じる。それは、「サブカルチャー」が「カウンターカルチャー」であり続ける可能性があったにもかかわらず、なぜ日本の「サブカルチャー」は「カウンターカルチャー」として持続しなかったのか。この問いに対しては山田 (2000; 2009), 上野・成田・小森 (2009), Cassegård (2013) といった論者の議論が参考になる。

一つは、担い手の自身の変容や社会化による問題である。山田真茂留は、1960年代における対抗の担い手である、いわゆる「団塊の世代」が1980年代に消費社会を率先して主導する存在となり、対抗文化を率先して商業化することにより、若者文化から対抗性を取り去ってしまったのだと論じる(山田 2000:30, 2009: 79)。こうした議論は「対抗文化の商業化」として Hebtige や Thonton といった古典的な対抗文化論においても主張されるところであり (Thonton 1996, Hebtige 1976=1986)、アメリカのカウンターカルチャー論においても指摘されている (竹林 2019)。さらに小谷敏は、1960年代対抗文化を担った若者たちが、高齢化と企業社会への参入によって保守化・脱政治化したと主張する点で、山田の対抗文化に関する議論と若年層の政治的無関心化を結びつける役割を担っている (小谷 1993)。上野・小森・成田 (2009) もまた、かつての対抗文化の担い手たちがそれとは意識せず商業化のもとで文化の主導者・成功者となっていった点を挙げている。しかし、かつての対抗文化の担い手たちは積極的に「転向」したわけではない点もまた重要である (山田 2000; 2009, 北田 2005)。であるとすれば、なぜ権威への反発や効率的・競争性・合理性が支配する現代社会といった価値を根強く有する対抗文化は、意図せざる結果として対抗性なき下位文化となったのか。

ここで報告者は、雑誌やラジオと言ったメディアを通じた「送り手」(編集者、製作者、パーソナリティ)と「受け手」(リスナー、読者)とのコミュニケーションが、その文化の内実まで変容させるという可能性について考えたい。小森 (2011) は、1970年代の若者がアメリカ文化をどのように受容したのかという問いに基づき、若者雑誌『ポパイ』と『宝島』などの事例分析を行った。『宝島』は、ドラッグやロック音楽、公民権運動などのカウンターカルチャーを紹介する「カルチャー誌」として台頭するが、ファッション雑誌『ポパイ』の刊行年である1976年以降娯楽文化の記事が増加し、大衆文化的な色彩を強めていく。一方『ポパイ』は海外の生活様式の紹介を軸にアメリカの物質文化を提示する雑誌として人気を博したものの、消費主義に傾倒した読者の需要に応えるために、商品紹介に特化したカタログ誌面化へと舵を切っていった。『ポパイ』の編集者たちは、あくまでアメリカの優れた物質文化を提示するつもりが、読者らのメイド・イン・アメリカを要求する苛烈なブランド主義に突き動かされる形で「消費」主体の誌面づくりを余儀なくされてしまう。また対抗文化の紹介を数多く行ってきた『宝島』は、『ポパイ』創刊の影響により1976年よりカウンターカルチャー色を潜めざるを得なくなってしまう。

先行研究は、1970年代後半から1980年代前半にかけて、若者は「社会運動」からもやがて「政治」からも距離を置いたと捉えている。しかし、果たして10年間という若者文化にとっては必ずしも短くない期間の中で、当時の若者たちはどのように社会運動から距離をとり、カウンターカルチャーから「対抗性」を除去し、政治に背を向けていったのか。1968年の全共闘運動や、1972年の連合赤軍によるあさま山荘事件を境に、「政治の季節」「激突の時代」が突然終焉を迎えたというわけでもなく、その残滓は社会のみならず若者文化の至るところに残っていたらう。各種メディアでの、カウンターカルチャーからサブカルチャーへという若者文化の変遷を見れば、その残滓がいかに社会から消失していったのかという変容が明らかになり、若者論・現代社会論の研究に貢献できるのではないか。

申請者は「若者文化」の媒体のひとつとして、1970年代以降の読者参加型雑誌メディアを対象として若者の「無気力化」「政治的無関心化」を検証しようと試みた。そこでは学校教育への批判や性役割に対する疑問から政治や社会について誌上で議論する若者たちの投稿が多く見られたためである (富永 2020)。深夜ラジオと投稿雑誌の担い手は部分的に重複しており、深夜ラジオ番組にも政治的・社会的議論や意見表明の源流があると分かったため、1970年代以降のラジオ番組を対象に研究を行うこととした。

ラジオというメディアはそれ自体が広域に聴取可能なメディアと捉えることができるが、投稿雑誌と異なる点は、ハガキでの投稿のほかにFAXや電話での参加でも可能であるところだ。電気通信媒体を伴うことで、リアルタイム性が高く、密度の濃いコミュニケーションを可能にしていたと考えられるだろう。ラジオによる高密度のコミュニケーションは、政治的・社会的なトピックに関する議論の積み重ねや情報量をさらに広い範囲から収集し、蓄積することにも繋がる。本研究は、こうした複合的なメディアの性格が政治的・社会的対話に与えた影響を問うものでもある。

2-2 本研究の方法と貢献

本研究は、前項までに述べたような仮説を踏まえ、ラジオ番組「オールナイトニッポン」(1967年-現在)のうち、1970-80年代を中心として、1990年代以降と比較することによってその対抗性の在り処を分析した。そのうえで、可能な限りの音源調査とともに、また首都圏・近畿圏を中心に各時期の主要番組に関わった構成作家・パーソナリティ・投稿者の関連雑誌・新聞記事の調査、またリスナーに対する聞き取り調査を行った。本研究はなぜ、娯楽のための深夜ラジオ番組において「社会的・政治的事柄に対する真剣な話し合い」の場が開かれたのかを、当時の若者の政治的立ち位置と投稿・編成内容の関連から分析する。具体的には、(1)若者たちの「政治の季節」が終焉し、「バブル」「消費社会」といった言葉で若者文化が表象された1980年代まで、(2)バブル崩壊から就職氷河期、若者たちが「ロスジェネ」と呼ばれる社会的弱者となった2000年代まで、また(3)景気の停滞とともに若者のコンサマトリー(自己目的)傾向が顕著となる現代において、政治的・社会的トピックとその扱われ方がどのように変化したのかを、投稿者による「投稿の傾向」と、構成作家の「投稿の選定基準」「番組の作成傾向」から明らかにする。

投稿者に関しては、それぞれの時期において番組を越境して投稿を行う「ハガキ職人」「常連投稿者」と呼ばれる代表的な人々が数名おり、各期において5-6名に聞き取りを行う。また投稿者から構成作家になる者もいるため、各期において主要と考えられる構成作家2,3名にも聞き取りを行った。合計21-27名(投稿者15-18名、構成作家6-9名)への聞き取りを文字起こしした上でデータソースとし、メディア論・若者文化論の先行研究をもとに考察を進めた。

投稿・投書を通じて、現代日本における青年の社会参加を論じる研究については日本史研究・メディア研究の中でも多くの研究があり、戦後であれば、福間(2016, 2020)や北田(2005)などが挙げられる。また、テレビ・ラジオ番組を対象に同様の事象を扱った研究としては、佐藤(2017)があり、すべてに共通しているのは、通時的な「若者/青年」表象を通じ、戦後一貫して若者たちが政治から退避するさまを描いた点である。本研究はこうした先行研究とは異なり、いかに若者たちが非政治的に見える生活の中に、政治や社会への関心を織り込んでいったのかを、ラジオ番組におけるコミュニケーションを検討することで明らかにする。ラジオは若者たちにとって、政治的・社会的なことがらに関する討議が可能な「公共圏」だったと捉える。

公共圏に関する研究は、ユルゲン・ハーバーマスをはじめとして多くの研究があるが、過去20年の実証研究ではむしろ公共圏で話されるトピックの転換に関する議論が多く行われている。とりわけ Eliasoph(1997)は、アメリカの人々が政治について語ることを忌避するさまを受け、地方議員や市民活動に携わる人々が、市民とコミュニケーションを続けるうちに国際政治や福祉、環境といった、言わば「大文字の政治」に関する語彙を用いなくなる傾向があることを明らかにした。大きな政治から身近な問題に取り組み、結果として国家や国際政治に関与する回路を絶たれてしまう傾向は、近年の欧州・北米における若者の政治参加にも見られると指摘されている(Eliasoph 2013)

本研究は、深夜ラジオ番組における若者の政治的・社会的コミュニケーションという、一見マイナーでローカルにも見えるトピックである。しかし本研究は、先行研究が検討し得なかった、若者たちが「大文字の政治」を題材にコミュニケーションを図る過程を分析することで、メディア論・若者論に貢献するものである。

3 成果

成果に関しては、聞き取りデータ・音声データ等に基づく知見ではあるが、ここでは新聞・雑誌資料といった引用可能なデータを援用して報告を行う。

3-1 データから読み取れる対抗性の変遷

本研究では、ニッポン放送によるラジオ番組「オールナイトニッポン」を軸に、当該番組の聴取可能な範囲でのコンテンツ分析と、番組に関する、パーソナリティーや関係者による新聞・雑誌記事を収集した。また、主にリスナーに対する聞き取り調査も補足的に行った。

政治的なトピックとしては、1976年に放送された「あのねのねのオールナイトニッポン」による、放送中のロッキード社に対するいたずら電話が挙げられる。こうした企画は、生放送中の警視庁に対する電話企画などと同様に「伝説」として懐古的に語られ、例えば大手新聞などで批判的に取り上げられたり、「始末書を何枚書いた」といったエピソードとともに語り継がれることで、政治的トピックが、性的なトピックとともに

に「不謹慎」という形で受容されて、それが「ラジオらしさ」として流通していく。

1970年代後半以降は、「ビートたけしのオールナイトニッポン」に見られるような、当時進学率が劇的に上昇していた大学の学生文化や、バブル前夜で興隆していた消費社会の「気取り」に対するカウンターカルチャーの受け皿として深夜ラジオ文化が作用していた。年長者が牽引する若者文化でなく、マスカルチャーや年長者への「対抗」によって存在する、若者独自の文化を切り拓いていこうとしたとも考えられるだろう。報告者は10人弱のリスナーに対して聞き取り調査を行ったが、聴取していた者に特徴的な態度として、若者雑誌やテレビ番組といった他のメディアとの越境性や横断性を強調した受容の仕方がある。雑誌、テレビ、ラジオといった媒体を軸としながら、若者たちはメディアミックス化された形で「若者文化」「サブカルチャー」を共有していたこともまた明らかになった。

ここから考えられる点として、ラジオ番組において「政治」が見られなくなる分水嶺として1970年代中盤があるのではないかと考えられる。1970年ラジオ受容のメディアミックス化、かつラジオにおける「対抗性」「政治性」が薄まり、一種のコマーシャリズムに傾倒した実状を共有したものとして、若者向け雑誌『ビックリハウス』に寄せられた以下のような投稿がある。

創られた若者たちの場であり、行動する若者たちの代弁者にほんのわずかなりともなり得たのはもう昔の話である。いまでは、若者がラジオを創っているのではなく、ラジオが若者を創っている。日本放送、夜、10時30分「青春どまんなか」という番組がある。森本レオのDJ番組だか先日そのなかでレオが1枚のレコードを抱えてスタジオに飛び込んでくるという設定で、“幻の歌手・能登道子”の特集があった。レオに言わせると“能登道子、3年程前にキングレコードからLPを出したまま行方不明”「歌はお世辞にもうまいと言えないが、他のレコードは捨てても、この1枚のレコードだけを持っていたい」と大変な惚れようである。番組放送後、さっそく反響があった。能登道子とはどんな女の子か、能登道子についてくわしいことを知りたいという声である。当然のごとく、ディレクターは待ってましたとばかりに《能登道子はいずこ?》のキャンペーンをはり、新聞広告まで出すという念の入れよう。ところが、当の幻の歌手とやらが、ひょっこり私の家に現れた。彼女、現在は平凡なOL生活、近々サラリーマンの彼氏と結婚するという。そんな彼女が新聞で日本放送のディレクターが自分を探しているというのを知り、未練たらしく名乗り出て、もう一度歌の世界に復帰してみないかという誘いをうけ、思い切ることができず私のところへやって来たというわけだ。私は「幻でいいんだ。ノコノコ現れたら、聴衆者もがっかりする」と少々彼女には残酷な忠告をした。その後、彼女はどうか、番組がどうなったか私は知らない。だが、ちょっと探せばすぐに見つかる彼女を、“幻の歌手”としてとり上げ、新聞広告まで出したディレクターの意図は見えずいている。おそらく、これからも第2、第3の創られた“幻の歌手”が登場してくることだろう。だが聴衆者はだまされない。主体的な聴衆者はますますラジオに愛想をつかし、我を愛するラジオは再び死滅の道を歩むことになるだろう。

(『ビックリハウス』1975年3月号, p57)

さらに、あのねのねやビートたけしのオールナイトニッポンにおける語りを通じて見られた「不謹慎性」は、製作者・聴取者の共通理解を通じてラジオの独自性として認められていく。以下は、ビートたけしが写真週刊誌『フライデー』編集部で暴行を行った事件で有罪判決となった後、ニッポン放送「オールナイトニッポン」に復帰した際の記事である。

講談社発行の写真週刊誌「フライデー」編集部に入、懲役6月執行猶予2年の有罪判決を受けたタレントのビートたけしが、26日未明のニッポン放送「オールナイトニッポン」に出演、事件と裁判をネタに30分間にわたって「毒舌」を連発した。ニッポン放送では、この日の出演は、たけしが突然放送局に現れての“ハプニング”だとしているが、有罪判決確定後の芸能界復帰第1弾で、同局では、7月3日未明の同番組から、レギュラーとして正式復帰させるとしている。(中略)ニッポン放送編成部によると、たけしは26日午前1時ごろ、「軍団の応援に来た」と突然、放送局に現れた。このため、スタッフがその場で出演させることを決めたもので、たけしがマイクの前に座ったのは、午前2時半から3時までの30分間。検事や弁護士らを得意のギャグでこきおろす発言も飛び出したが、放送局側は、「彼一流のギャグで聴取者も冗談と受け止めており、問題はない」と話している。(1987年6月26日、朝日新聞東京夕刊)

こうした、製作者と聴取者の間での「共通理解」によって、ある言動が社会での倫理や規範とは別にその媒体内での「冗談」として了承されるコミュニケーションは、「ビートたけしのオールナイトニッポン」以外の事例でも見られた。ラジオ番組が一見周縁的・マイナーに見えつつも、しかし文脈を共有したリスナーと製作者による密度の濃いコミュニケーションが可能であるからこそ、こうした共通理解に基づく独自の文脈理解が可能となる。もう一点指摘すべきこととしては、メディアミックスの効果により、他メディアでのふるまいがそのまま「文脈・背景」としてラジオに流用されるという在り方である。この事実は、1970年代に見られた「政治いじり」とはまた異なる文脈で社会との接点が生まれたということを端的に示すものである。では、こうした変化は若者文化における対抗性の変遷とどのように関連しているのだろうか。

3-2 メディア論・若者論による分析

調査データの分析に関する先行研究として、メディア論・若者文化論の研究を援用した。

1970年代以降の深夜ラジオ番組とその関連記事・リスナーたちの聞き取りを通じて本研究が明らかにしたのは、第一に深夜ラジオ番組から政治性が消失したのは早かったが、それでも形を変えて対抗性は残り続けたこと、第二にラジオが他メディアの受容を前提とした「メディアミックス」状況下に置かれたことである。この変容は、政治的な時事ネタ・注目トピックをそのまま「いじった」1970年代のオールナイトニッポンから、消費社会や典型的な若者ライフスタイルへの批判を込めた1980年代のオールナイトニッポンへの変遷として見ることもできる。しかし通底してそこにあるのは、製作者と聴取者の共通理解に支えられた「冗談」（あるいは「不謹慎」）を許す空間であるという前提だ。

こうした知見をどのように捉えればよいか。先行研究で挙げた小森(2011)の研究と同様、受け手との密なコミュニケーションが作り手のある方向に誘導し、結果としてコンテンツの性格そのものを変容させた、という分析視角が有効なのではないかと報告者は考える。さらに言えば、難波(2007)による若者文化としての雑誌研究が明らかにした、既存社会へのカウンターという「縦」の対抗と同時に、若者によるマスカルチャーに対する別種のカルチャーという「横」の対抗という性格もあったのではないか。

つまり、若者たちは、たしかに大人たちの作り出す規範や消費社会的なライフスタイルに対して「茶化す」ような言動を繰り返しつつも、メディアを通じたネットワークを形成しながら他の若者集団との差異化を繰り返している。難波(2007)は「内輪空間」としての若者メディアという言葉を用いたが、ラジオを通じて人々は独自の共通理解に基づきながら、ラジオの外では一種非常識とされる「冗談」「不謹慎」なコミュニケーションを繰り返すことで連帯を強める。担い手の意識としては対抗的なふるまいであるが、行えば行うほど政治・社会に関するトピックが「不謹慎」として受容され、時には「冷笑」の対象となる。これを繰り返すうち、かつては対抗性をもって見られていた政治的トピックがそうは扱われなくなっていく、脱政治化していくさまも、若者雑誌をめぐる状況と同様である(富永 2020)。

同じ政治的トピックを扱いながら、かつて「対抗性」であったものがある種のいじりの対象として再構成されていくメカニズムを本研究では明らかにしているが、一方近年ではメディアミックスを通じ、ラジオの「内輪空間」としての性格もまた変容しているのではないかと考えられる。こうしたメディアそのものの現代的性質が若者文化の変容に当たってどのような影響を持つのかは、今後の課題としたい。

【参考文献】

- Eliasoph, N, 1997 *Avoiding Politics*, Cambridge University Press.
福間良明 2017 『「働く青年」と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩選書。
福間良明 2020 『「勤労青年」の教養文化史』岩波書店。
Hebdige, D. 1976 *Subculture: The Meaning of Style*, Methuen & Co Ltd. (山口淑子訳『サブカルチャー——スタイルの意味するもの』未来社)
片瀬一男, 2015『若者の戦後史——軍国青年からロスジェネまで』ミネルヴァ書房。
北田暁大 2005 『嗤う日本の「ナショナリズム」』NHK 出版。
小森真樹 2011 「若者雑誌と1970年代日本における『アメリカナイゼーション』の変容——『宝島』, 『Made in U.S.A. catalog』, 『ポパイ』, 『ブルータス』を事例に」『出版研究』42号
小谷敏 1993『若者論を読む』世界思想社。

- 石田佐恵子 2007 「世代文化論の困難——文化研究における『メディアの共通経験』分析の可能性——」『フォーラム現代社会学』6号
- 村上謙三久 2018『深夜のラジオっ子』筑摩書房.
- 難波功士 2006「“-er”の系譜——サブカルチュラル・アイデンティティの現在」『関西学院大学社会学部紀要』100: 181-189.
- 難波功士 2007『族の系譜学——ユース・サブカルチャーズの戦後史』青弓社.
- 中西新太郎 2012『問題としての青少年——現代日本の<文化—社会>構造』大月書店.
- 大塚英志 2004『「おたく」の精神史——1980年代論』講談社現代新書.
- Roszak, T. 1969 *The Making of a Counter Culture: Reflections on the Technocratic Society and Its Youthful Opposition*, Doubleday & Company, Inc. (稲見芳勝・風間禎三郎編『対抗文化の思想——若者は何を作り出すか——』ダイヤモンド社)
- 佐藤卓己 2017『青年の主張』河出書房.
- 竹林修一 2019『カウンターカルチャーのアメリカ【第二版】』大学教育出版(第一版 2014年刊行)
- 富永京子 2017『社会運動と若者——日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版.
- Thornton, S. 1996 *Club Cultures: Music, Media and Subcultural Capital*, Wesleyan.
- 上野千鶴子・小森陽一・成田龍一 2009 「ガイドマップ 60・70年代」岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著『戦後日本スタディーズ②——60・70年代』紀伊国屋書店
- 山田真茂留 2000「若者文化の析出と融解——文化志向の終焉と関係志向の高揚」宮島喬編『講座社会学七 文化』東京大学出版会:21-46.
- 山田真茂留 2009『<普通>という希望』青弓社.

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
「若者文化における政治への関心と冷笑」	年報社会学論集	2020年9月